水明インターネット句会（選句・選評）　令和三年十二月

1	静香 はるみ 正信 鶴城 道を	冬の魔女恋の媚薬はまだできぬ	インパクトがあり、面白い。出来たら最初に頂きたい。冬に魔女が媚薬を作るのが良い。恋の媚薬と魔女の取り合わせに惹かれる。「魔女」が効いている。	古賀由美子
2		山茶花や朝もや吸ひて笑みにけり		秋谷風舎
3		しばれるや棄て船撤去の川漁師		木村隆夫
4	はるみ	日溜をナビする猫や冬ざるる	ほのぼの感。猫は暖かい所が好きですからね。	網野雪を
5		園児らのほほやわらかし冬うらら		木村るみ子
6	翔太 風舎 萬蝶 マスミ 京子	予科練の笑顔の遺影虎落笛	笑顔の遺影の葛藤を虎落笛という季語によって際立たせている。若い兵士の笑顔に隠された悲しい叫び、更に残された家族の悲しみの叫びが、聞こえてきます。虎落笛の儚い音が笑顔の虚しさを誘う、お上手。遺影が笑顔であるだけに、虎落笛が切なく身に染みる。上五・中七がすっと入る。対する虎落笛が涙を誘う。	新　暦文
7	清吉 芳春 修 のぞみ 道を	名刀の妖しき反りや月冴ゆる	季語と名刀の取り合わせの巧みさ。「月冴ゆる」によって、名刀の妖しさがより際立っています。名刀の妖しい反りと清冽な三日月の取合せが見事。名刀の鋭い刃先が、厳しい寒気と表現している。寒夜の月光に光る名刀が見えるよう。	保坂翔太
8	はるみ 徹平 香を舎子 朝雪 風京	縄張りなど知ったことかと木の葉舞ふ	強い季節風に否応なしに木の葉が舞い込む。ユーモアと優しさを感じる。季語との取り合わせが絶妙。木の葉の舞う様子をユーモラスに表現した。樹の主は気を使う事でしょう。軽妙でごじゃれた表現、滑らかな調べも秀逸。擬人化した散るさまが面白い。	丸山マスミ
9	子美 平文 由夫 徹 暦 喜	惜しみなく饂飩へ七味霜の夜	さぞかし温まることでしょう。季語と七味の不思議な取合せが楽しい。惜しみない七味で霜の夜の寒さの景色が見えるようです。	檜鼻ことは
10		数へ日やカレー・ラーメン・手抜き飯		本橋稀香
11	粉雪	為すことの十指に余る年の暮	やる事が多い！！を上手く表している。	青木鶴城
12	ことは 正信	大晦日壊れたままのシュレッダー	何とも今の世相を現すような御句です。果たして処分したいのは不要文書だけだろうか。	望月のぞみ
13		冬めくや摘むものもなく庭終まい		奥山粉雪
14		不忍は古戦場たり蓮枯るる		山中いちい
15	風舎	「おはよう」の言葉を包む息白し	通学途中の児童と作者との挨拶のやりとりか、溌剌とした児童の息と作者との清々しい情景が浮かんできます。	野田静香

水明インターネット句会（選句・選評）　令和三年十二月

16		高天原は更に遠きに冬銀河	染谷正信
17		数へ日や散髪すませこれでよし	井口俊晴
18		掛持ちの政治家走る年の暮	反町修
19	粉雪	ポインセチアを抱へシスターミサの夜 お忙しそうなシスターの姿がコミカルです！	河野はるみ
20		寂光や主人の居ない冬の庭	岡田芳春
21		終活はまたも未完に年の暮	近藤徹平
22	稀香 京子	神橋に巫女の手揺るる煤払 煤竹の緑、神橋の朱、巫女の白と朱のいでたちが澄みきった空気の中鮮やかに浮かぶ。中七が優雅な煤払に仕上げている。	村杉清吉
23	朝香 暦文 マスミ	一閃は鷹の矜持よ播磨灘 寒い海を飛ぶ鷹の様子が良く表現されている。鷹の野生の誇りが、「一閃」「矜持」の措辞に簡潔に表現されていて良い。	正木萬蝶
24	粉雪 稀香 修	年の瀬や大安売りの文字の撥ね 売り手の意気込みが「撥ね」に現れている。歳末の景気の良い店内が文字のはねでうまく表現されている。いかにも大安売りをするという意欲があふれた。	日髙道を
25	香吉 夫 静清 隆城 鶴	焼き芋を分け合ふ湯気のつぎつぎと 暖かさが伝わって来て良い。冬の季節ならではの情景をうまく表現している。湯気の様子。分け合う様子が見える。	小林京子
26	ことは	数へ日や狭き廊下の手摺垢 ご高齢の方がお住まいのお家なのでしょう。年の暮れを無事迎え、来る年もお元気に過ごされますように。	持永喜夫
27	翔太	冬菊や繙（ひもと）き誦す記紀の歌 大昔の記紀の歌を誦する様と冬菊の取り合せがよい。	秋谷風舎
28	ことは 雪を 喜夫	雪催ワイングラスの割れし音 そろそろ雪か静かな気配の中、突然割れるワイングラスの音。ハッと我に返った一瞬ですね。この「雪催」は相当に冷え込んでいます。グラスの割れる音と無機質な冷気の景色が見えるようです	古賀由美子
29	静香	裾飾るソーラーパネル冬の山 雪が解けている景を裾飾るの言葉が秀逸。	木村るみ子
30	正信	手品師が冬銀河消す一瞬に 現実にありえないことを手品師という具象性を持ってきて詠んだところが秀逸。	木村隆夫

水明インターネット句会（選句・選評）　令和三年十二月

31	いちい	蒲団の中で首裏どっちの手で掻くか ぬくでぬくとした布団とどうでもいいことの取り合わせが楽しい	網野雪を
32	由美子 いちい	木の葉踏む禰宜の沓音しめやかに 端正な品格が薫ります。あの黒いぽっくりのような沓と色とりどりの木の葉のコントラストが美しい	丸山マスミ
33	隆夫 道を マスミ	綿虫や暮色の中にこぼれ入る 「こぼれ入る」の措辞が良い。夕景色の中に消えっていった綿虫。はかない美しさが詩的に表現されている。	新　暦文
34		北風をがっしり受くる御神木	保坂翔太
35	るみこ 翔太 喜夫	凍へ手に包みお椀の汁を吹く 一連の動きに共感。凍てついた手に熱い汁、実感がこもっている。炊き出しの朝の寒さの景色が見えるようです	青木鶴城
36	雪を	寒鯉や一筆箋の女文字 しっとりとした筆跡でしょう。	檜鼻ことは
37	清吉　隆夫 るみこ 芳春　鶴城 のぞみ 萬蝶	沈ませて跳ね上がりくる柚子湯かな 季節の行事の表現の巧みさに納得。柚子の動き。柚子の表現。幼い子と柚子湯を楽しんでいるのでしょうか、湯ぶねの柚子の動きが愉快です。何かを言わず、巧みな表現です。柚子が生き物みたいな躍動感、跳ね上がるが良い。	本橋稀香
38		三日目のおでんの匂うダイニング	望月のぞみ
39	稀香	見送りの指に息吐く今朝の冬 家族を見送りおえてふと指先の冷たさに冬の到来を感じる表現が上手い。	奥山粉雪
40	暦文 萬蝶	自分史にに少し嘘足し松の内 正月なので許される罪の無い嘘、分かる分かる。	染谷正信
41	芳春	寛ぎて白鳥を待つ湛水田 持続可能な自然の営みが、平穏に進んでいる様子に安堵させられる句です。「寛ぎて」の表現が効いています。	山中いちい
42	るみこ 修	笑み零れ子ども食堂冬の凪 テーマが良い。季語が疑問。風もおさまり、子供の笑みが自然とこぼれる明るい子ども食堂を的確に表現。	野田静香
43		数え日や為すべきことは増えてゆき	岡田芳春
44	朝香	亀のごと首をすくめて冬ざるる 冬の寒い日は、首をすくめて暮らす亀に共感。	井口俊晴
45		巌の鷹過る獲物に一直線	反町修

水明インターネット句会（選句・選評）　令和三年十二月

46　いちい

本当の恋はどの恋年の夜や

煩悩を消す除夜の鐘を聞きつつせんのないことを考えているのがユーモラス。

河野はるみ

47

生家より遺影を移し年の暮

近藤徹平

48　由美子　徹平

去年よりマリアの若き聖夜劇

やっぱりマリア様は若くてきれいな人がいいです。中七の謎が深まる。

正木萬蝶

49

初霜や枝折戸先の下駄の跡

村杉清吉

50

数へ日や手向けの花も一つ増え

持永喜夫

51

いささかの金より情け年の暮

日髙道を

52　のぞみ

何気なき素振りで探す君の賀状

小林京子